

いわて復興だより



平成 23 年 3 月 11 日に東日本大震災津波が発生しました。発災以来、国内外から多くの温かい励ましや御支援をいただいております。心から感謝申し上げます。この「つながり」を大切にしていきたいと思っております。

がんばろう!岩手 つながろう!岩手 第 162 号 令和 2 年 6 月号

復興に向けて歩み続ける岩手県の今を紹介します

ケーススタディ集『コミュニティ支援のすゝめ』発行及び『新型コロナウイルス感染症対応に係る生活支援相談員活動マニュアル』策定

被災地では、仮設住宅から災害公営住宅等への転居などにより、多くの地区で新たなコミュニティづくりが必要となりました。

岩手県では、そのような課題に対応するため、平成 29 年度より「被災地コミュニティ支援コーディネート事業」を実施してきました。

このたび、この事業を通じて得られたコミュニティ形成の取組事例やノウハウをまとめた「コミュニティ支援のすゝめ【完全保存版】」を県のホームページで公開しました。

このスタディ集では、市町村の担当課、支援団体へのアンケートの回答結果を基に、地域づくりの現場で遭遇する 10 の課題別に解決策を例示しています。

今後起こり得る災害時のコミュニティ支援に役立てるためぜひご覧ください。

また、岩手県社会福祉協議会と連携し、「新型コロナウ

イルス感染症対応に係る生活支援相談員活動マニュアル」を策定しました。

このマニュアルには、新しい生活様式に沿った支援方法が記載されていますので、地域でコミュニティ支援等に取り組んでいるみなさんもぜひご活用ください。



「コミュニティ支援のすゝめ」

■問い合わせ：

ケーススタディ集：
岩手県復興局生活再建課
☎ 019-629-6926



相談員マニュアル：
岩手県保健福祉部地域福祉課
☎ 019-629-5421



「いわての復興教育プログラム」の副読本「いきる かかわる そなえる」改訂

岩手県教育委員会は、震災から 10 年目を迎え、震災の教訓を伝え、岩手県の復興・発展を支える人材の育成に資する目的で作成された「いわての復興教育プログラム」副読本「いきる かかわる そなえる」を、6 年ぶりに改訂しました。

また、小学校低学年用・高学年用・中学校用に加えて、震災当時の未就学児が高校生になったことを踏まえ、新たに高校用の副読本を作成しました。

この副読本では、県内全 33 市町村の話題や各校の実践事例を様々な切り口で取り上げたり、東日本大震災津波伝承館の展示内容を掲載し、教訓を語り継ぐことの大切さを伝え

ています。さらに、様々な場面での困難な事象も取り上げ、資料ごとに問いを入れるなど、課題解決に向けた取組や活動について、地域の状況に応じて自ら学び、考えることができる内容となっています。

なお、この副読本は 13 万 4 千部作成され、県内全ての公立小中学校、高校及び特別支援学校等に配付され、県ホームページでも公開していますので、ぜひご覧ください。



■問い合わせ：岩手県教育委員会事務局学校調整課 ☎ 019-629-6139



小学校低学年用



小学校高学年用



中学校用



高校用

いわて復興応援団(員)大募集中!

知って、買って、食べて、行って応援!

登録
無料

首都圏等にお住まいの方を対象に、応援団員(個人)と応援団(法人及び団体)の登録を募集しています。登録者には岩手県の復興の取組や観光・物産・首都圏でのイベント情報などをお届けします。

詳しくは岩手県東京事務所ホームページをご覧ください。

いわて復興応援団

検索

ていこ 県立高田高校の艇庫を 六ヶ浦漁港に再建

陸前高田市
RIKUZENTAKATA

岩手県が陸前高田市広田町の六ヶ浦漁港に再建を進めていた県立高田高校の艇庫が完成し、震災以降の9年間休止していたカキやホタテの養殖実習が今年度から再開されました。

震災で全壊したこの艇庫は、六ヶ浦漁港の防潮堤整備に合わせ、令和元年7月に着工、令和2年1月に完成し、今年度から使用を開始しました。

船舶や漁具が収納できる平屋建ての艇庫に加えて、隣接する2階建ての講義棟には、講義室やシャワー室が備えられ、座学と実習がこの1箇所で行えます。

これに伴い、県立高田高校海洋システム科では、養殖実習のほか、震災以降は他の場所で行ってきた小型船舶免許やダイビング資格の取得に向けた実習を、震災前と同じように地元の広田湾で行うことが可能となりました。

同校3年生の熊上葵隼（くまかみあおと）さんは、「海の生き物や環境を使った授業や実験が増えることが楽しみです。艇庫の完成により、広田湾での授業や実習の機会が増えるため、地域の海や水産業について深く学ぶことができると思います。」と、期待を膨らませています。



六ヶ浦漁港に再建された高田高校の艇庫（右）と講義棟（左）

津波跡地に イチゴ生産施設の一部完成

大船渡市
OFUNATO

大船渡市が東日本大震災津波で被災した津波跡地の利活用事業として整備を進めてきた浦浜地区（三陸町越喜来（おきらい））の産業用地に、イチゴ生産に向けた栽培用、育苗用のビニールハウスと作業棟が完成しました。

この産業用地は、面積が約0.9haで、大船渡市が、防災集団移転促進事業による移転元地（高台移転にともない被災者から買い取った土地）と、その周辺の民有地などを集約し整備したもので、今後、イチゴの生産拡大に向けた施設の増設が予定されています。

また、大船渡市は「夏イチゴ産地化プロジェクト」の一環として、イチゴ生産拠点の基盤を作り、営農リーダー人材の確保や育成を行うとともに、夏イチゴの産地ブランド化を進めていきます。

■問い合わせ：

大船渡市商工港湾部産業政策室 ☎ 0192-27-3111



一部完成したイチゴ生産施設

つなみ 世界へ、未来へ、「いわて TSUNAMI メモリアル」

東日本大震災津波の事実と教訓を伝える施設「東日本大震災津波伝承館」
（いわて TSUNAMI（つなみ）メモリアル）を紹介します。

東日本大震災津波伝承館には、現在、来館者の案内や展示の解説などに従事する「解説員」が9人在籍しており、この中に令和2年度に新たに採用された2人の新人解説員がいます。

陸前高田市出身の人首（ひとかべ）ますよ解説員と熊谷葉月解説員は、4月から先輩解説員の指導のもと、伝承館の展示に関する研修に加え、各地の震災伝承施設や被災地の視察を重ねてきました。

「自然災害を自ら判断し、身を守る行動ができるように記憶に残る解説をしていきたい。」「次に起こる津波や、様々な災害に対して私たちに何ができるか一緒に考えていきましょう。」と2人の新人解説員は、意気込みを語っています。

現在、感染症対策を講じながらの解説を行っていますが、今後も来館者に東日本大震災津波の事実と教訓をより分かりやすく伝えていきます。

■問い合わせ：東日本大震災津波伝承館
☎ 0192-47-4455



熊谷解説員（左）と人首解説員（右）

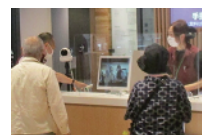


研修の様子

東日本大震災津波伝承館の感染症対策

- ① 供用機器類の一部利用停止
- ② シアターの座席数縮小
- ③ 館内清掃及び換気の徹底
- ④ 手指消毒及びマスク着用等のお願い
- ⑤ 赤外線サーモグラフィや非接触型体温計による来館者の体温測定

赤外線サーモグラフィによる体温測定の様子



復興支援に感謝 沿岸地域の郷土芸能特集

なかのななづまい

“中野七頭舞”

岩泉町

IWAIZUMI



東日本大震災津波の被害を受けた沿岸地域の郷土芸能の復興の姿と支援への感謝をお伝えしていきます。今回は岩泉町の郷土芸能「中野七頭舞」について、佐々木 隆幸さんに伺いました。



中野七頭舞保存会
会長
佐々木 隆幸さん

「中野七頭舞」は神楽舞の一部で、岩泉町小本地区中野出身の「神楽太夫」工藤喜太郎が、約200年前に黒森神楽の「シットギジシ」（神楽の一行が神楽宿に宿泊する際に踊る舞）という演目を基に創始し、地元で踊り継がれるようになったと言われています。

七種類の道具を使い、七種類の演目があることから七頭舞と言われ、「太鼓」、「笛」、「鉦（かね）」で奏でられるお囃子の軽快なリズムに合わせた、躍動感ある踊りが魅力です。

東日本大震災津波では、岩泉町の小本地区が甚大な被害を受け、会員の中にも家が被災し、舞いの衣裳を失う人もいました。

幸いにも道具を保管している場所は被害に遭いませんでしたが、七頭舞は、地元のお祭りで披露することをはじめ暮らしに根付いたものなので、震災直後は踊る機会も全て失われ、自分たちから踊ってみせようという気持ち

ちにもなりませんでした。

そのような中で、首都圏で活動している民族歌舞団“荒馬座”さんなど多くの方々からの支援により、震災4ヶ月後の平成23年7月には岩泉町民会館で公演を行うことができました。その出来事が、保存会の活動再開へ大きな原動力になったことが強く印象に残っています。

今は、コロナウイルスの影響で公演の中止や活動ができない状況にありますが、我々ができることを恩返ししていきたいと思います。

今後、県外公演が再開できたら積極的に交流し、支援への感謝を伝え、会員の経験拡大・資質向上に力を入れるとともに、地元の子どもの喜びと自信につながるよう、指導伝承活動を行ってきたいと思っています。



中野七頭舞の演舞
(写真提供：中野七頭舞保存会)

シカ肉出荷制限が初めて解除 ジビエ処理加工場が操業開始

大槌町

OTSUCHI

令和2年5月18日（月）から大槌町でジビエ処理加工場が操業を開始しました。解体されたシカの肉は、検査機関で全頭を対象に放射性物質検査が行われ、安全性を確認した上で出荷されます。

シカ肉の出荷については、釜石市または大槌町で食肉用に捕獲し、県が定めた出荷・検査方針により管理・検査され、基準値を下回った場合に限り出荷が認められます。

この処理加工場は、大槌町安渡地区の町有地を活用し、ジビエ商品の生産販売会社によって運営され、今後、食肉加工のほか、シカの角や皮を有効活用したインテリア雑貨の販売や狩猟体験ツアーなども企画することとなっています。

■問い合わせ：大槌町産業振興課 ☎ 0193-42-8717



ジビエ処理加工場



処理加工されたシカ肉

さんりくいものセレクション ～りあすぱーくマルシェ～、 りあすぱーく“オンライン”マルシェの開催

盛岡市

MORIOKA

新型コロナウイルスの感染拡大により、売上が減ってしまった三陸沿岸の起業者等を支援するため、6月18日（木）から7月末まで盛岡市のパルクアベニュー・カワトクでマルシェを開催しています。地下1階食品売場の一角で、宮古市で獲れた鮭の燻製や陸前高田市のりんごジュースなどを販売しています。

また、同時に、既にネット販売を行っている起業者等の販売促進を支援するため、共同でのPRを実施しています。各販売サイトへのリンクは「りあすぱーく～三陸起業ネット～」のサイトに掲載しております。

オンラインショッピングを通じて三陸沿岸の魅力的な商品をぜひお楽しみください。

岩手県沿岸部の名品で、素敵な自宅時間を。

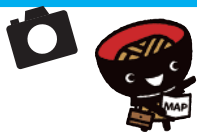
りあすぱーく
“オンライン”マルシェ

「りあすぱーく～三陸起業ネット～」
はこちらをご覧ください。



■問い合わせ：

岩手県復興局まちづくり・産業再生課 ☎ 019-629-6931



3.5km に渡って弧を描くような砂浜が続く「十府ヶ浦」(野田村)は、三陸復興国立公園の一部で、“三陸ジオパーク”のジオサイト(ジオパークの見所)です。



十府ヶ浦海岸
(写真提供：野田村)



“ほたてんぼうだい”からの眺め
(写真提供：野田村)

青森県八戸から岩手県を縦断し、宮城県気仙沼までの太平洋沿岸に広がる“三陸ジオパーク”のジオサイトでもある「十府ヶ浦」は、切り立った断崖が多く見られる三陸海岸では珍しい、貴重な砂浜です。

砂浜は、「小豆砂(あずきすな)」と呼ばれる淡い紫色の

小石で覆われており、その色にちなみ、野田村の道の駅「のだ」の観光物産館は“ばあぶる”と名付けられました。

「十府ヶ浦」は、村のシンボルであるバラ科の落葉低木「ハマナス」の群生地としても知られています。

現在、東日本大震災津波からの復興に伴う海岸防潮堤の工事のため、海岸への立ち入りは一部制限され、ハマナス群生は一部を移植・保護していますが、休憩施設「ほたてんぼうだい」からは、海岸線と雄大な太平洋の絶景を望むことができます。

■交通：三陸鉄道十府ヶ浦海岸駅から徒歩で3分
三陸鉄道陸中野田駅から車で5分

■問い合わせ：
野田村 未来づくり推進課 ☎ 0194-78-2963



連載「いわてさんりくびと」では、被災地・三陸の復興に向け、熱い想いをもち、活躍する方々を紹介していきます。

第107回は、細江 絵梨さんを紹介します。

PROFILE

東京都出身。国際協力に興味を持ち、大学生時代から、途上国でボランティア活動を行う。

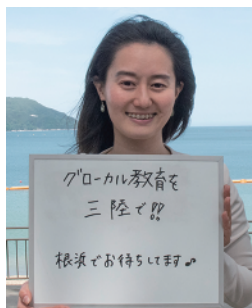
震災を機に盛岡市に移住し、平成29年6月、「釜石ローカルベンチャーズ」として釜石市に着任した後、現在、(一社)根浜 MIND(ねばまインド)とともに、根浜地域を拠点に地域コーディネーターや、新たに教育事業などに取り組む。

ローカルベンチャーとして

「東日本大震災津波という、人の力ではどうすることもできない災害から立ち上がろうとする多くの人の力強い姿を見て、自分も何かしなければいけないと思い、東京の会社を退職し、岩手県に移住しました。」と細江さんは、当時を振り返ります。

いわて さんりく びと

フリーランサー、
(一社)根浜 MIND、
(一社)世界防災フォーラム
細江 絵梨さん
(ほそえ えり)



グローバル教育を
三陸で!!
根浜でお待ちしています♪

地域にある資源や可能性から新しい事業を創り出す“ローカルベンチャー”として活動した細江さんは、「根浜には、自然だけでなく、防災のノウハウや人との繋がりなど、様々な資源があります。それを海外と繋ぎ、学びあう機会を広めたいです。」と活動への思いを話します。

“グローバル教育”で国際交流を

“グローバル教育”の“グローバル”とは、グローバルとローカルを掛け合わせた造語で、地域の魅力を発信すると同時に海外の魅力を知り、学びを深めて行動に移していくためのものです。釜石市は、様々な国から復興支援をいただき、ラグビーワールドカップ2019™日本大会で試合が開催されるなど、海外から多くの人が訪れ、地元の高校生にとって海外への関心が深まったように思えます。今後、地元の子供たちと海外を繋げられる教育活動に取り組んでいきたいです。」と細江さんは、根浜を拠点とした国際協力・交流に力を注ぎます。

岩手県の被害状況

令和2年5月31日現在

皆様のご支援、ありがとうございます

令和2年5月31日現在

- ▶人的被害 死者(直接死):4,674人 行方不明者:1,112人
死者(関連死):469人
- ▶建物被害(住家のみ、全半壊) 26,079棟

被害状況等の詳細

義援金・寄付金の募集等

いわて防災情報ポータル

検索

- ▶義援金受付状況 約187億3985万円(97,475件)
 - ▶寄付金受付状況 約200億9337万円(10,008件)
 - ▶いわての学び希望基金(※)受付状況 約100億5539万円(24,524件)
- ※被災した子どもたちが勉強やスポーツ等に励めるよう「くらし」「まなび」の支援に使われます。



いわて震災津波アーカイブ~希望~
約24万点の資料を検索・閲覧できます。



いわて震災津波アーカイブ

検索

いわて復興だより 第162号 令和2年6月25日発行
企画・発行：岩手県復興局復興推進課 ☎ 019-629-6945
編集・印刷：シナプス